

一方、現実の社会に生起するもろもろの事象にも絶えず目を向ける必要があると考えている。人文地理学も社会科学としての一面を持つと考えれば、全く同じことがいえるだろう。だから、新聞の中に関連テーマがあれば、客観的な資料であれ、解説・分析記事であれ、授業で教材の一部として利用することになっている。ところが、学生諸君はそれらの資料、記事が出ていたことを余り知らないようで、聞いてみるとその日の新聞を読んで来た学生は極めて少ないのである。

別に電車の中で読むことを奨めるつもりはないし、忙しい登校前に無理して読むにも及ばないであろう。しかし、この地球の上で人々が何を考え、どのように行動し、それらによって社会が現在どのような問題を抱えているのか、を正しくとらえるためにも、新聞を是非毎日読んでもらいたいと思っている。そのことが、間接的に地理学の学習への興味をよびおこし、その奥行を深めることにもつながるのではなからうか。

同 窓 会

内 藤 博 夫

八月の初めだったと思うが高校時代の友人で、中小企業の経営者となっているT君から電話がかかってきた。来年の3月で高校を卒業してから満20年になるので、それを記念して同窓会を開きたい。については幹事の1人になってくれないか、というのである。20周年と聞いてショックであったが、昭和33年卒であるから53年3月になれば確かに満20年が経過したことになる。T君から同窓会の開催に協力してほしいと頼まれたときは、率直に言って大変なことになると思った。しかし旧友と再会することの意義は理解できたので引受けることにした。以来、幹事の集りは5回ほどもたれた。主な顔ぶれはT君のほか運輸省勤務のA君、銀行マンのS君、商社員のN君、科学機器メーカーに務めているKさんらであった。パーティーの日時は53年1月15日の1時からと定まった。会場は母校所在地、立川市のあるホテルのホールを借りることになった。形式は同期会として行なうことになったので、対象者は約400人(男子300人、女子100人)である。最初に受持った仕事はパーティーを予告する手紙の印刷とその印刷物を高校の同窓会担当の先生のもとに届けることであった。印刷物ができ上がったので、9月の初めに久しぶりに母校を訪ねた。久しぶりといっても、多分卒業後始めて訪ねたことになるのだと思う。毎日のように中央線で通勤していながら、立川は通過するばかりであった。大学生を相手にしている日常のためか、構内で目にふれた高校生の表情がいかにもあどけなく思われた。

いよいよ1月15日となった。この日はいうまでもなく成人の日である。我々が卒業した年に生まれた赤ん坊はこの日に成人式を迎えたのである。10年ひと昔というが、ふた昔がすぎってしまったわけだ。当日はN君らと受付けをつとめることになった。開会の時刻が近づくにつれて、少し大きさにいえば全国から同期生が続々と集まってきた。受付けにいればどうしても多くの旧友とあいさつをかわすことになる。会費の徴収はそっちのけで話し込んでしまう場面がしばしばあった。何しろ20年ぶりである。男子も女子もずいぶん変った。貫録のついた人もいれば高校生のときとほとんど

かわらない人もいる。顔を見てもわからず、出席者署名簿に記入された氏名を見てはじめて顔と氏名が一致した人もいた。出席者は来賓としてお招きした先生方を含めて135名であった。A君の司会でパーティーはとどこおりなく終了した。パーティー終了と同時に自然発生的にクラス会の呼びかけが相次いだので、会場の後始末をしたあと、別の会場で開かれた三年生のときのクラス会に出席してみた。今は都庁につとめておられる担任の先生を囲んで、各人の歩んだ道が被露され、それぞれの持場で中堅として活躍していることがよくわかり、大いに啓発されるところがあった。

昨年の暮れには中学校の同窓会も開かれ、旧交をあたためることができた。今年いただいた年賀状には同窓会をそろそろやろうではないかと書かれてあるものが二つあった。一つは大学の教養課程時代のクラスの友人から、いま一つは学部3、4年生の頃のサークルの友人からである。どうやら我々の世代も同窓会を必要とする年齢に達したということのようである。

フィールド・ワークの必要性和楽しさ

斎藤 功

歳末の隠岐には春の木と呼ばれる椿の花と撫子の可憐な花が咲いていた。椿、白槇、ツブキ、ハゴロモヒトツバ等がみられる隠岐の沿岸集落は伊豆の沿岸集落に酷似し、黒潮の影響をうける照葉樹林文化圏の一部であることを私に印象づけた。しかし、詳細にみると、チシマザサの小群落の存在と暖冬にしては早い初雪とが私に隠岐の島々が日本海に浮かぶ島であることをしらせてくれた。

隠岐の牧畑を調査したいという私の短年の夢をかなえてくれたのは「集中豪雨に伴う崩壊が常畑（開地：ケエチ）に与えた影響」を島前の中ノ島（海士町）、知夫里島（知夫村）で調査する友人の好意によるものであった。アワビ、イカなど新鮮な海の幸を賞味し、夜のふけるまで友人と酒くみかわし、隠岐島の成因、沿岸集落の諸相、牧畑の位置づけなどをわずかな知識に想像力を交えて話し会るのは、それがマンガチックで、独断と偏見に富んだものだけに忘れ難いものであった。

牧畑の遺構は松や杉の林となっている山林が急斜面にもかかわらず段畑状になっており、現在でも島民でありさえすれば、家畜の放牧権を有するため、山地のいたるところに垣が設置され、林間放牧が実施されている事実からうかがわれた。現在でも利用形態は異なりこそすれ、清水牧・高田牧・空牧・中牧・崎山牧（海士町多井・崎地区）・居島牧・西牧・中牧・東牧（知夫村）などの厳然たる牧区が設置され、輪転式に利用されているのである。たとえば、昔の牧畑について老人（77才）にきいてみると、

「ワシの若い時分には、この地区の山は殆んど牧畑で木もなく、垣にする木材は焼火山まで船でとりに行ったもんだ」。つまり、島前の中央火口丘と思われる焼火山は外輪山である中ノ島、知夫里島、西の島の垣材供給地であり、その利用区分もはっきり画定されていたという。だから、

「ワシが子供の時分にはこの山は殆んど耕作されており、家畜は地主さんから借りていたんだ。借り料は『足一本』といってな、4頭の仔牛が生れてやっと1頭が自分のものになるんだ。それに多くの宅地や山も地主さんのものであったから、牧畑を耕した収穫物の3/4は地主のもんだった。地主の